



呼吸器外科医療録⑥

検診で肺の影を指摘されたら

—肺がんを疑った時の検査—



検診で肺の影を指摘されたら、まずは精密検査を受けましょう。症状がないからと放置してはいけません。一般的にはCTで詳しく調べることになります。

胸部X線で肺の影と指摘されても、肋骨などの胸壁や、心臓、血管やその周囲の陰影のこともあります。肺の影も肺炎などの感染症や炎症もありますし、腫瘍^{へんえん}のこともあります。腫瘍も辺縁がなだらかなものからいびつなものまで様々です。

いびつな腫瘍は肺がんを疑う必要があります。診断は、気管支鏡とい

う口から気道に挿入するカメラで行います。ただ、気管支は奥に行くほど細くなり、直接見て組織をとれないので診断が難しく、手術により診断をすることもよくあります。また、肺がんは、脳や骨、肝臓、副腎に転移しやすく、全身の検査をする必要があります。

肺がんの大きさ、リンパ節や全身への転移について検査を行うことで、ステージ（病期）を決定し、最適な治療へと進んでいきます。

けんこうQ&A 在宅医療⑥

在宅医療で実際によくある困りごとは？



在宅医療に関心はあっても、「自宅で本当に生活できるのだろうか」と不安を感じる方は少なくありません。実際に相談を受ける中でも、病気そのものより、日々の暮らしに関する悩みが多く聞かれます。

例えば「薬の種類が増えて管理が大変になった」「通院しなくてよくなったが、体調の変化に気が付きにくい」「介護の方法が分からない」「一人暮らしなので何かあった時が心配」といった声があります。また、介護する家族からは「仕事との両立が難しい」「夜間の対応が不安」「自分の体調

を崩しそう」といった相談も少なくありません。

こうした困りごとは、患者さんやご家族だけで解決するものではありません。在宅医療では、医師、訪問看護師、ケアマネジャー、介護職員、薬剤師などが連携し、それぞれの立場から支援を行います。

病気を治療することも大切ですが、安心して暮らし続けられることも同じくらい大切です。

